

平和宣言

本年も、ここ千鳥ヶ淵において、全戦没者追悼法要を修行いたします。

このご法要を迎えるたびに、私たちの心は痛みます。戦後77年が経ち、私たちの教団は、なぜ、あの戦争に反対の声を上げられなかったのか、自問と自責を繰り返しています。

本年2月24日、ロシアによるウクライナ侵攻というニュースが世界に衝撃を与えました。今もなお戦禍に苦しむ人たちの映像がテレビを通じて放送され、あらためて戦争という悲しい現実を目の当たりにしています。ウクライナでは多くの一般市民の命が奪われ、ロシア側においても、多くの兵士が命を落としています。戦争は、双方に憎しみや悲惨な結果をもたらします。

今回のロシアによるウクライナ侵攻をきっかけに、「軍備の増強が急務だ」と声高に叫ぶ政治家もあり、世間もそれに同調する雰囲気にも含まれつつあります。厳しい安全保障環境の中で、私たちは仏道を歩む者として、難しい判断をせまられています。

釈尊のお言葉に、「恐怖が生じたから武器を持ったのではない。武器を持ったから、恐怖が生まれたのである」という重要な指摘があります。銃社会の恐ろしさは、誰もが簡単に銃を手にすることから始まっています。相手が持っているから、自分も持たなければという発想では、際限のない不安や恐怖の連鎖を生むだけです。

専如ご門主は、ご親教「念仏者の生き方」の中で、武力紛争などの世界規模での課題に言及され、その原因を、「私たちの無明煩惱にある」と見抜いておられます。煩惱の主なものとしては、「むさぼり」「いかり」「おろかさ」の三つの煩惱が有名です。武力紛争の多くは、領土の拡大や資源の確保といった「むさぼり」に起因していることが多いでしょう。「自分の方が正しい」という主張のもと、「正義の戦争」が繰り返されてきたのではないのでしょうか。「自分^が正しい」と我を張るのは「おろかさ」かもしれません。

煩惱は煩惱によってそれを退治することはできません。闇は闇によってそれを破ることができないように。煩惱の闇を破ることができるのは、智慧の光に会うことによってです。私たち本願寺派の「宗制」前文には、「あらゆる人びとに、阿弥陀如来の智慧と慈悲を伝える」ことが定められています。またご門主は、ご親教「浄土真宗のみ教え」の中で、「み教えを依りどころに生きる者となり、（中略）むさぼり・いかりに流されず、（中略）喜びも悲しみも分かち合い、日々に精一杯つとめます」とご教示になっています。

平和は、ただ言葉や願いだけで実現するものではありません。私たち一人ひとりの、仏法^{ともしび}を灯火とし、仏智に導かれた行動が求められています。

世界に一日も早く「平和」な日が訪れますよう、日々に精一杯つとめてまいりましょう。

2022（令和4）年9月18日

浄土真宗本願寺派

総長 石上 智康